

保育者の保育観

—幼稚園と保育所の比較からみた—

A Comparative Study of the Belief System in Kindergarten and Nursery School

中 俊 博 (保健体育教室)

Toshihiro NAKA

教育的側面をもつ幼稚園と福祉的側面をもつ保育所の保育者の保育観について、5因子25項目から両者の保育観の特性、並びに指導経験年数と保育観について調査した結果、両者とも「子ども中心、過程重視、子どもの興味・意欲重視」である。また、集団指向と個人指向では場面や活動に応じた指導である。基本的生活習慣といった「しつけ面」では、指導性の高いことも両者とも同傾向である。さらに、目立つ程ではないが保育所の方が活動や遊びにおいてやや指導性が強いものの、のびのび保育の傾向を呈している。

次に、指導経験年数からみると10年以下群と11年以上群間では目立った相違は見られないものの、10年以下の指導者は子どもと一緒に遊ぶ、偏食を避ける指導の厳しさ、のびのびと活動させるといった行動面に特性の一端を見せている。11年以上群では子どもの自己主張、自発性、遊びに熱中している時は遊び優先のといった心理面への配慮に特性の一端を見せている。

キーワード：就学前教育、保育観、指導法

はじめに

平成元年に幼稚園教育要領の改訂、同2年に保育所保育指針の改訂があり、教育現場では保育の見直しが行われている。幼稚園は学校教育法に基づき、保育所は児童福祉法に基づいているから両者の発生の社会的背景には、教育的側面をもつ幼稚園と福祉的側面をもつ保育所となるが、対象になる幼児の年齢は同じであり、子どもの発達を保障する観点からは両者間の保育内容には相違はない。

即ち、幼稚園教育要領と保育所保育指針の保育内容は表現の仕方に相違はあるものの、子ども一人ひとりの発達特性を把握し、子どもの発達に必要な活動を体験させ、子どもの健やかな発達を促すための環境づくりを行い、将来人間として生活していく基盤の確立の時期であるとしているところは両者とも同様であるといえる¹⁾。

しかし、両者間のイメージは異なり、幼稚園は、相対的に落ち着いた、ある意味で教育的なイメージをもたれ、保育所は、保護的で親しみやすい感じである。また、幼稚園は静か、まじめ、派手、落ち着いたイメージであり、保育所は、親切、暖かい、面白い、感じがいい、といったイメージであるとの指摘²⁾がある。

また、梶田等は³⁾幼稚園の保育者の方が支持する意見は、困難な時にうまくやりとげられるように積極的な援助、保育者も子どもの中に入って一緒に遊ぶ、成果よりも経過をたどる指導法等であり、保育所の保育者の方が支持する意見は、思いやり、やさしさなどを身につけさせる指導、忍耐力を育てる指導、保育所の方針と家庭のしつけをお互いに関連づける、子どもの成長の記録を定期的に家庭に伝達するといった項目にその特徴を見せていると述べ両者の保育観の特性を記述している。

そこで、教育要領及び保育指針の改訂後における幼稚園と保育所の両保育者の保育観の特性を見ることとした。

なお、ここでの保育観は、森等^{3) 4)}の指摘する子どもの認識観、発達観、指導観、保育内容観、保育者の人生観等保育に含まれる観念形態の総称である。

1. 調査対象・方法

1) 調査対象者

今回の調査対象者は、幼稚園については和歌山県幼稚園教育研究会参加者（1995. 11.）、中紀ブロック公立幼稚園教育研修会参加者（1996. 1.）、阪南市立及び忠岡町立の園内研究会参加者等の64名と保育所は和歌山県中堅保母研修会参加者（1995. 11.）60名（公立45名、私立15名）の合計124名である。

また、指導経験年数から10年以下群（Y群：若年群）と11年以上群（E群：年長群）に分けて両群間の特性をも探る。なお、群別対象者数、平均指導経験年数は表1の通りである。

表1 調査対象者の指導経験年数別人数及び平均指導経験年数

	10年以下 Y群（名）	平均経験年数 （年）	11年以上 E群（名）	平均経験年数 （年）	合計 （名）
幼稚園	28	5.8 ± 2.4	36	19.8 ± 5.7	64
保育所	30	6.5 ± 1.8	30	17.3 ± 3.1	60

〔平均値 ± 標準偏差〕

2) 方法

保育観の調査は、梶田等⁵⁾の因子分析結果と中澤等⁶⁾の調査項目を参考に、5因子25項目の質問からA、B、C、を選択回答する。

第1因子は「教師中心—子ども中心」で質問項目8項目、第2因子は「結果重視—過程重視」で質問項目5項目、第3因子は「子どもの興味・意欲重視—積極的な教師の働きかけ重視」で質問項目6項目、第4因子は「集団指向—個人指向」で質問項目3項目、第5因子は「のびのび重視—しつけ・安全重視」で質問項目3項目の合計25項目である。

なお、回答に当たっては、A、Bの相対する質問項目のどちらかが、自分の保育観に近いを判断し、A、Bどちらともいえない場合はC（どちらともいえない）に回答するようにする。

2. 結果・考察

1) 幼稚園と保育所の指導者の保育観について

(1) 第1因子(F1)の「教師中心-子ども中心」

先ず、第1因子の8項目の質問内容を掲げ続いてその結果・考察を行う。

第1因子(F1)の項目1 (No.1)

- A. すべての子どもがなるべく等しい経験や活動をするように指導する。
- B. それぞれの子どもがその特性に応じた経験や活動をするように指導する。
- C. どちらともいえない。

第1因子(F1)の項目2 (No.2)

- A. うまく遊べるように、教師がルールをつくったり考えたりして方向づける。
- B. 子ども自身が遊びを考えたり、ルールをつくって遊ぶのを見守る。
- C. どちらともいえない。

第1因子(F1)の項目3 (No.3)

- A. 造形などでは、始めに教師がていねいに計画し、それにそって指導する。
- B. 造形などでは、課題の大枠だけを決め、あとは子どもの自主性にまかす。
- C. どちらともいえない。

第1因子(F1)の項目4 (No.4)

- A. ケンカが生じた時、教師が直ちに入って解決する。
- B. ケンカが生じた時、子どもに解決をまかす。
- C. どちらともいえない。

第1因子(F1)の項目5 (No.5)

- A. 笛などの楽器の演奏がうまくできるように指導する。
- B. うまく演奏することよりも、音楽そのものを楽しむように指導する。
- C. どちらともいえない。

第1因子(F1)の項目6 (No.6)

- A. 子どもが互いの気持ちを配慮してゆずりあうように指導する。
- B. 子ども自分の気持ちや要求を率直に主張できるように指導する。
- C. どちらともいえない。

第1因子(F1)の項目7 (No.7)

- A. 子どもの協調性を育てる。
- B. 子どもの独自性を育てる。
- C. どちらともいえない。

第1因子(F1)の項目8 (No.8)

- A. 遊びが盛り上がっていても、時間をきちっと守る。
- B. 遊びが盛り上がっていれば、遊びを優先する。
- C. どちらともいえない。

以上の質問項目の回答結果を表2に要約する。

さらに、質問項目の内、No.1, No.2, No.6, については図示をする。

まず、項目1の経験や活動に対する指導では、幼稚園・保育所の両者の保育観で高い数値は両者ともにBの子ども中心型で、その比率はそれぞれ60.9%と51.7%である。

ただ、保育所の場合、Aの等しい経験や活動をするように指導するが38.3%で幼稚園の21.9%より16.4%も高く、Bの子どもの特性に応じた経験や活動の差の9.2%から見ると保育所の方がやや教師の指導性が高い傾向にあると考えられる。

質問項目2の場合も、両者ともBの子どもからの遊びをひろめ、見守るとの回答が高くそれぞれ65.6%と63.3%を示し、Aの教師が方向づけるでは、保育所の方が21.7%で幼稚園の7.8%の約2.8倍で、教師の指導性が幼稚園より高いことを示している。

図1, 図2からも両者とも子ども中心の保育を行っているものの、保育所の方がやや教師の指導性が高い傾向を見せているといえよう。

質問項目3の造形の指導では両者ともBの子どもの自主性にまかすが、それぞれ87.5%と93.4%と目立って高い比率を示している。

質問項目4のケンカについては、両者とも、子どもに解決をまかせようとするものの、内容によっては仲裁にはいらねばならないようで、明確な回答ができないようである。

即ち、両者とも、僅かではあるがCのどちらともいえないが、54.7%, 48.3%でBの子どもに解決をまかすの42.2%, 46.7%を上回っていることから推測できる。

質問項目5の楽器の演奏については、両者とも演奏の上達よりも、音楽そのものを楽しむ指導が、それぞれ79.7%と78.4%を示し、上達は、3.1%, 8.3%と目立って低い比率を示したことから両者ともに子どもが楽しく音楽体験をする指導していることが窺える。

質問項目6の自分の気持ちの表現行動については、両者とも、一番高い比率はBの率直に主張するで、次はCのどちらともいえないであり、最後がAの相互の気持ちを配慮するの順である。しかも、他の項目と異なり一番高い比率のBの数値は、幼稚園の場合45.3%, 保育所の場合は55.0%であり、Cのそれぞれの比率の34.4%, 23.3%, 及びAの20.3%, 21.7%とは目立つ程の差でもないことから、自己主張を育てながら思いやり、やさしさ等の愛他心を育てる保育の困難さの一面が窺えられる(図3参照)。

質問項目7は、両者ともCのどちらともいえないが、それぞれ43.8%, 48.3%が第一位で、次いでAの協調性が、40.6%と36.7%でありほとんど差がなく、独自性は両者とも、15.6%, 15.0%とほぼ同比率を示している。

即ち、両者とも独自性や自立性を育てたいという希望を抱きながらも、集団生活での保育だけに仲間が存在を知りその仲間とのかかわり方を育てる保育をねらっていることが窺えられる。

質問項目8は、両者ともBの遊びが盛り上がっている時は遊びを優先するが、幼稚園では70.3%, 保育所では66.7%と一番高く、次はCのどちらともいえないがそれぞれ23.4%と30.3%となり、両保育者とも子どもの遊びの重要性を認識して指導している。しかし、時間に追われていることも否めないことが窺える。

(2) 第2因子(F2)の「結果重視－過程重視」

第2因子5項目の質問項目と結果及び考察

第2因子(F2)の項目9(No.9)

- A. 子どもの長所よりも短所を克服するように指導する。
 B. 子どもの短所よりも長所を伸ばすように指導する。
 C. どちらともいえない。

表2 幼稚園・保育所の保育者の保育観

「教師中心—子ども中心(F1)」の結果(%)

項目 No.	回答	幼稚園 N = 64	保育所 N = 60
F 1 1	A	21.9	38.3
	B	60.9	51.7
	C	17.2	10.0
F 1 2	A	7.8	21.7
	B	65.6	63.3
	C	26.6	15.0
F 1 3	A	0.0	3.3
	B	87.5	93.4
	C	12.5	3.3
F 1 4	A	3.1	5.0
	B	42.2	46.7
	C	54.7	48.3
F 1 5	A	3.1	8.3
	B	79.7	78.4
	C	17.2	13.3
F 1 6	A	20.3	21.7
	B	45.3	55.0
	C	34.4	23.3
F 1 7	A	40.6	36.7
	B	15.6	15.0
	C	43.8	48.3
F 1 8	A	6.3	3.3
	B	70.3	66.7
	C	23.4	30.3

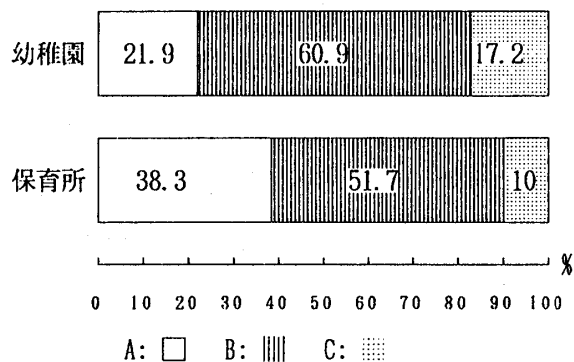


図1 「教師中心—子ども中心」(項目No.1)

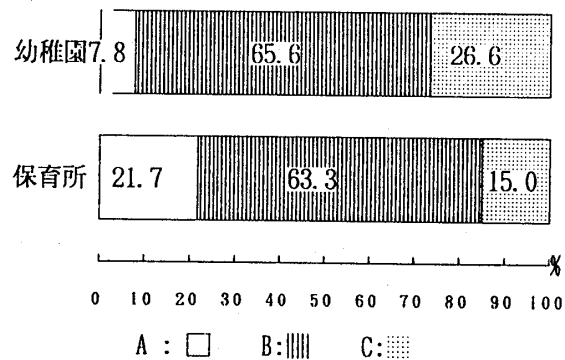


図2 「教師中心—子ども中心」(項目No.2)

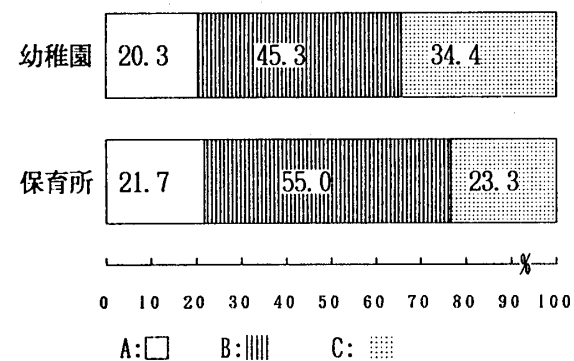


図3 「教師中心—子ども中心」(項目No.6)

第2因子（F 2）の項目10（No10）

- A. 失敗しないように慎重に取り組むように指導する。
- B. 失敗してもいいから積極的に取り組むように指導する。
- C. どちらともいえない。

第2因子（F 2）の項目11（No11）

- A. 音感や情感よりも、言葉や数がわかるように指導する。
- B. 言葉や数よりも音感や情感を育てるように指導する。
- C. どちらともいえない。

第2因子（F 2）の項目12（No12）

- A. 造形では良い作品ができあがることを目標にして指導する。
- B. 造形では作品のできばえよりも、活動を楽しむように指導する。
- C. どちらともいえない。

第2因子（F 2）の項目13（No13）

- A. 運動遊びでは、うまくできることを目標にして指導する。
- B. 運動遊びでは、運動のできばえよりも運動を楽しむように指導する。
- C. どちらともいえない。

以上の質問項目の回答結果を表3に要約し、質問項目のNo11、No13を図示する。

項目9では両者とも一番高い比率を示しているのは、Bの短所よりも長所を伸ばす指導で、幼稚園の比率は73.4%保育所の比率は68.3%であり、次はCのどちらともいえないが21.9%と26.7%で両者ともよく似た結果を示している。

質問項目10の子どもが失敗しないように慎重な行動をさせるか、失敗を恐れず積極的な行動をさせるかでは、幼稚園では100%，保育所は95.0%と両者ともBの失敗を恐れず積極的な行動をさせる指導が極めて高いことが窺える。

のびのびとした保育の中で意欲的に行動する子、挑戦する子といった目標を掲げて実践していると考えられる。

質問項目11の知識重視の指導と情操教育については、両者ともに情操教育を重視した保育観で、その比率は幼稚園64.1%，保育所60.0%であり、言葉や数の指導はそれぞれ3.1%，1.7%でごく僅かである。しかし、Bの情操教育の比率は6割程度であり、Cのどちらともいえないが32.8%，38.3%も見られたことから、両者ともに、意図的に言葉や数の導を行ってはいないものの、日常の保育の活動で随意学習する機会を考慮することで自然に学習するという保育観であろうと考えられる。（参考図5）

質問項目12の造形における作品づくりの指導では、両者ともにBの作品のできばえよりも楽しく活動する指導が極めて高く、それぞれの比率は幼稚園は92.2%，保育所は96.6%である。幼児期には豊富に造形遊びを体験させたい、それには先ず、自発的な活動をふくらませる指導であることがわかる。

質問項目13の運動遊びの指導においても、造形と同様に運動をうまくできることよりもBの楽しく運動遊びを行う指導が極めて高く、幼稚園は93.8%，保育所は93.3%である。

これらの結果より、幼稚園、保育所ともに保育活動を楽しむ行うために、よい結果を導く指導ではなく、活動そのものを楽しむことを重視する「過程重視」の指導であることがわかる。

表3 幼稚園・保育所の保育者の保育観
「結果重視－課程重視(F2)」の結果(%)

項目 No.	回答	幼稚園 N = 64	保育所 N = 60
F 2 9	A	4.7	5.0
	B	73.4	68.3
	C	21.9	26.7
F 2 10	A	0.0	1.7
	B	100.0	95.0
	C	0.0	3.3
F 2 11	A	3.1	1.7
	B	64.1	60.0
	C	32.8	38.3
F 2 12	A	3.1	1.7
	B	92.2	96.6
	C	4.7	1.7
F 2 13	A	0.0	1.7
	B	93.8	93.3
	C	6.2	5.0

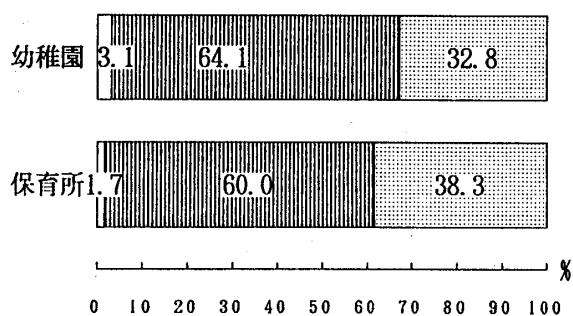


図4 「結果重視－課程重視」(項目No.11)

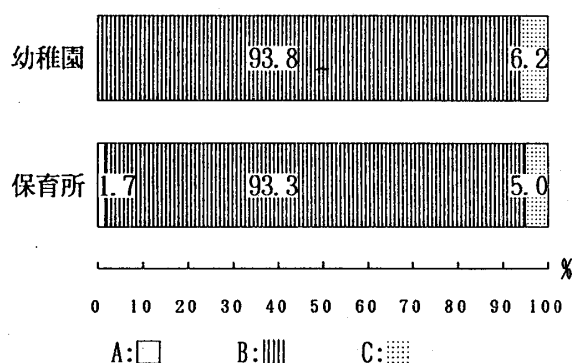


図5 「結果重視－課程重視」(項目No.13)

(3) 第3因子 (F 3) の「子どもの興味・意欲重視－積極的な教師の働きかけ重視」

第3因子6項目の質問項目と結果及び考察

第3因子 (F 3) の質問項目14 (No.14)

- A. 男の子も女の子も区別せずに指導する。
- B. 男の子らしさ, 女の子らしさを伸ばすように指導する。
- C. どちらともいえない。

第3因子 (F 3) の質問項目15 (No.15)

- A. 文字や言葉の学習は子どもの意欲にまかせる。
- B. 文字や言葉の学習を積極的に進める。
- C. どちらともいえない。

第3因子 (F 3) の質問項目16 (No.16)

- A. いろいろ活動に取り組ませ, なるべく幅広い体験を与えた方がよい。
- B. 体験の幅はせまくても, 一つのことにじっくりと取り組ませた方がよい。
- C. どちらともいえない。

第3因子(F3)の質問項目17 (No17)

- A. 少々時間がかかっても、きちんと正確にできる子を育てることが大切だ。
- B. 少々おどろいても、てきぱきとやる子に育てるのが大切だ。
- C. どちらともいえない。

第3因子(F3) 質問項目18 (No18)

- A. 鉄棒やマットなどの運動では、うまくできるよりも、こどもが興味をもてばいい。
- B. 鉄棒やマットなどの運動では、子どもがうまくできることが大切だ。
- C. どちらともいえない。

第3因子(F3)の質問項目19 (No19)

- A. 教師も子どもの中に入って一緒に遊ぶ。
- B. 子ども同志で遊ばせ、教師は見守るようにつとめる。
- C. どちらともいえない。

以上の質問項目の回答結果を表4に要約する。

項目14の男女の性差を考慮した保育については、幼稚園、保育所ともにAの男女を区別せずに指導するが、それぞれ50.0%、55.0%であり、活動面で性差が目立たない幼児期だけに性差を考慮しない考えながらも、幼稚園ではCのどちらともいえないが40.6%もあり保育の内容によっては性差を考慮した指導を行っていることが窺える。

項目15の文字や言葉の指導については、先の項目11の回答とも関連するが、Aの子どもの意欲にまかせ積極的に文字や言葉の指導を行っていないと考えられる。

項目16のいろいろな活動の体験の学習については、両者ともにAの幅広い体験が76.6% 81.7%であり、浅く、広く、多くの体験をさせる指導と考えられる。

運動における幼児期のねらいは、一つのことを深く学習するよりも、できる運動のレパトリの拡大であることから、運動に限らず日常生活における基本的な動作の身につけるためにも幅の広い豊富な体験を与える指導は当然といえる。

項目17の保育の諸活動において、きちっと正確に行う指導と、てきぱきと活動できるように指導するでは、Aの時間にとらわれずきちっと正確に行う子育てが、それぞれ48.4% 46.7%で次に比率の高いのはCのどちらともいえないで、その比率は42.2%、38.3%と項目14の性差とよく似た結果を示している。

このことは、保育内容、環境、場面等によって指導法に幅のあることが窺える。

項目18の鉄棒やマット指導では両者ともに運動がうまくできるよりも興味・関心を育てる指導が81.2%、88.3%と目立って高いことから子どもの興味・意欲重視の保育観といえよう。

(4) 第4因子(F4)の「集団指向—個人指向」

第4因子(F4)の6項目の質問内容と結果・考察について述べる。

第4因子(F4)の質問項目20 (No20)

- A. 一人ひとりの子どものペースよりもクラスのまとまりを大切にする。
- B. クラスのまとまりよりも、一人ひとりの子どものペースを大切にする。
- C. どちらともいえない。

第4因子(F4)の質問項目21 (No21)

- A. 「いただきます」「ごちそうさま」はクラス全員そろって言う方がよい。
- B. 「いただきます」「ごちそうさま」はそれぞれの子どもにまかせる方がよい。
- C. どちらともいえない。

第4因子(F4)の質問項目22 (No22)

- A. 嫌いな食べ物であっても栄養のバランスをとるためできるだけ食べさせる。
- B. 極端な偏食でなければ、嫌いな食べ物があってもかまわないので無理にたべさせない。
- C. どちらともいえない。

第4因子についての質問項目の回答結果については表5に要約している。

まず、質問項目20の一人ひとりの子どものペースを大切にするのか、クラスのまとまりを大切にするのかの回答で一番高い比率は、両者ともにCのどちらともいえないが、64.0%、50.0%、と目立つ程ではないが一番高い比率を示している。次は、Bのクラスのまとまりよりも一人ひとりのペースを大事にする考えが、それぞれ29.7%、30.0%であり、集団生活の中での保育だけに一人ひとりのペースを尊重したいと考えながらも、時間に追われている保育活動が目につかぶようである。しかし、保育者は、場面や活動内容に応じて集団生活の中で個人のペースを把握し援助していると考えられる。

また、Aの一人ひとりのペースよりもクラスのまとまりを重視する考え方は、幼稚園よりも保育所に高く、その比率は6.3%と20.0%で差は13.7%と目立っていることから、保育所の方がクラスのまとまりを重視する考えが幼稚園よりも高いと言えよう。

質問項目21食事時の「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつについては、両者ともに、そろって言う、子どもにまかせる、どちらともいえないと回答が分散している。

中澤等⁷⁾は食事場面の援助については年齢や食事習慣の確立度につれて、生理的意味合いから、マナーや会話といった文化的、社会的意味合いの場へと変化すると述べている。

このように食事場面の援助は年齢による発達、個人の体質、嗜好、速度等が影響するため明確な回答は困難となったのであろう。

質問項目22の偏食については、両者ともにAの栄養バランスのためできるだけ嫌いな食べ物を食べさせる指導が一番高く、それぞれ51.6%、65.0%であり、数字的には保育所の方がやや偏食について厳しい指導と言えよう。また、極端な偏食でなければ無理をしないが28.1%、23.3%であり個人指向も見られるものの、集団での共食による偏食をなくし、栄養のバランスのとれた食事指導が行われていると考えられる。

表4 幼稚園・保育所の保育者の保育観
「子どもの興味・意欲重視－積極的な
教師の働きかけ重視(F3)」(%)

項目 No.	回答	幼稚園 N = 64	保育所 N = 60
F 3 14	A	50.0	55.0
	B	9.4	18.3
	C	40.6	26.7
F 3 15	A	79.7	90.0
	B	3.1	0.0
	C	17.2	10.0
F 3 16	A	76.6	81.7
	B	3.1	10.0
	C	20.3	8.3
F 3 17	A	48.4	46.7
	B	9.4	15.0
	C	42.2	38.3
F 3 18	A	81.2	88.3
	B	0.0	0.0
	C	18.8	11.7
F3 19	A	62.5	46.7
	B	3.1	28.3
	C	34.4	25.0

表5 幼稚園・保育所の保育者の保育観
「集団指向－個人指向(F4)及び「のび
のび重視－しつけ・安全重視(F5)」(%)

項目 No.	回答	幼稚園 N = 64	保育所 N = 60
F 4 20	A	6.3	20.0
	B	29.7	30.0
	C	64.0	50.0
F 4 21	A	23.4	35.0
	B	34.4	33.3
	C	42.2	31.7
F 4 22	A	51.6	65.0
	B	28.1	23.3
	C	20.3	11.7
F 5 23	A	53.1	43.3
	B	29.7	48.4
	C	17.2	8.3
F 5 24	A	15.6	13.3
	B	68.8	71.7
	C	15.6	15.0
F 5 25	A	12.5	26.7
	B	60.9	51.6
	C	26.6	21.7

(5) 第5因子(F5)の「のびのび重視－しつけ・安全重視」

第5因子3項目の質問項目と結果及び考察

第5因子(F5)の質問項目23(No23)

- A. 用意された食事は、基本的には残さず食べた方がよい。
- B. 各々の子どもの食欲に合わせ食べた方がよい。
- C. どちらともいえない。

第5因子(F5)の質問項目24(No24)

- A. 基本的生活習慣のしつけよりも、楽しみながら食事をした方がよい。
- B. 食事を楽しむのもよいが、基本的生活習慣は身につけられるように指導すべきだ。

C. どちらともいえない。

第5因子(F5)の質問項目25 (No25)

A. 基本的生活習慣のしつけよりも、まず、子どもがのびのびと活動するように指導する。

B. まず、子どもの基本的生活習慣をしっかりと身につけるように指導する。

C. どちらともいえない。

第5因子についての質問項目の回答結果については表5に要約している。

まず、質問項目23の食事のマナーについては残さずに食べる指導は、幼稚園53.1%、保育43.3%で個人の食欲に合わすが、それぞれ29.7%、48.4%である。幼稚園は食事のマナー指導に、保育所は個人の食欲にとやや保育観の相違が見られる。

質問項目24の食事時の基本的生活習慣と楽しく食べる指導では、両者ともにBの基本的生活習慣を身につける指導が一番高く、68.8%、71.7%である。保育者は食事を通して先ず、しつけ教育を行い、楽しく食事を行うは発達に応じて行っていると考えられる。

最後の質問項目25では、両者ともにBの基本的生活習慣の指導が60.9%、51.6%と一番高く、のびのびした活動の前に基本的生活習慣の指導に重点をおいていることが窺えられる。これらのことから幼児期は、先ず、基本的生活習慣の指導を先行しつつ、子ども一人ひとりの興味、意欲を尊重しながら楽しい園生活を過ごす指導であると考えらる。

2) 指導経験年数と保育観

次に、指導経験年数から10年以下(Y群)と11年以上(E群)の二群に区分し、5因子別25項目の回答結果を表6に要約した。

概観するとY群(若年群)とE群(年長群)との間に目立った相違は見られなくよく似た結果を示している。

そこで、両群間で各項目の比率の順序に相違のある項目と両群間の比率差が10%以上を示した項目(下線を付けている)に着目して見ると、若年群は協調性を育てる(No.7)、少々時間がかかってもきちんと正確にできる子に育てる(No17)、教師も子どもの中へ入って一緒に遊ぶ(No19)、嫌いな食べ物でも栄養のバランスを考えて食べさせる(No22)、基本的生活習慣よりものびのびと活動するように指導する(No25)の4項目に年長群の指導者に比べて高い比率を示している。

一方、11年以上の年長群では、子どもの気持ちや要求を率直に主張する(No.6)、子どもの独自性を育てる(No.7)、遊びが盛り上がっていけば遊びを優先する(No8)、「いただきます」「ごちそうさま」はそれぞれの子にまかす(No21)が若年群に比較して高い比率を示している。

若年群は子どもと一緒に遊び、のびのびとした保育の中で仲間とのかかわりを指導し、偏食のない、しかも、きちんとした子に育てるという保育観と言えよう。

年長群は子どもの個性や気持ちを理解するといった内面に視点を当てた保育観と言えよう。

保育者の保育観

表6 5因子25項目別指導経験年数と保育観

項 目	Y 群	E 群	項 目	Y 群	E 群	項 目	Y 群	E 群
F 1 A	32.8	27.3	F 2 A	0.0	1.5	F 3 A	86.2	83.3
1 B	58.6	54.5	10 B	96.6	98.5	18 B	0.0	0.0
C	8.6	18.2	C	24.1	0.0	C	13.8	16.7
F 1 A	17.2	12.1	F 2 A	0.0	4.5	F 3 A	<u>63.8</u>	<u>47.0</u>
2 B	63.8	65.2	11 B	65.6	59.1	19 B	15.5	15.2
C	19.0	22.7	C	34.4	36.4	C	<u>20.7</u>	<u>37.8</u>
F 1 A	1.7	1.5	F 2 A	3.4	1.5	F 4 A	8.6	16.7
3 B	89.7	91.0	12 B	93.2	95.5	20 B	29.3	30.3
C	8.6	7.5	C	3.4	3.0	C	62.1	53.0
F 1 A	1.7	6.1	F 2 A	1.7	0.0	F 4 A	32.8	25.8
4 B	46.6	42.4	13 B	96.6	90.9	21 B	<u>27.6</u>	<u>39.4</u>
C	51.7	51.5	C	1.7	9.1	C	39.6	34.8
F 1 A	5.2	6.1	F 3 A	51.7	53.0	F 4 A	<u>63.8</u>	<u>53.0</u>
5 B	77.6	80.3	14 B	15.5	12.2	22 B	24.1	27.3
C	17.2	13.6	C	32.8	34.8	C	12.1	19.7
F 1 A	20.7	21.2	F 3 A	87.9	81.8	F 5 A	50.0	47.0
6 B	<u>36.2</u>	<u>62.1</u>	15 B	0.0	3.0	23 B	36.2	40.9
C	<u>43.1</u>	<u>16.7</u>	C	12.1	15.2	C	13.8	12.1
F 1 A	<u>44.8</u>	<u>33.3</u>	F 3 A	77.5	80.3	F 5 A	12.1	16.7
7 B	<u>8.6</u>	<u>21.2</u>	16 B	6.9	6.1	24 B	74.1	66.6
C	46.6	45.5	C	15.6	13.6	C	13.8	16.7
F 1 A	8.6	1.5	F 3 A	<u>58.6</u>	<u>37.9</u>	F 5 A	<u>44.8</u>	<u>34.8</u>
8 B	<u>58.6</u>	<u>77.3</u>	17 B	5.2	18.2	25 B	36.2	42.4
C	<u>32.8</u>	<u>21.2</u>	C	36.2	43.9	C	19.0	22.8
F 2 A	6.9	3.0	Y群：若年群【指導経験年数10年以下の者（58名）】 E群：年長群【指導経験年数11年以上の者（66名）】					
9 B	69.0	72.7						
C	24.1	24.3						

3 要 約

「教師中心—子ども中心」「結果重視—課程重視」「子どもの興味・意欲重視—積極的な教師の働きかけ重視」「集団指向—個人指向」「のびのび重視—しつけ・安全重視」の相対する5要因25項目から幼稚園と保育所の指導者の保育観についてアンケート調査を行い以下の結果を得る。

- (1) 幼稚園と保育所の両者ともに「子ども中心」「過程重視」「子どもの興味・意欲重視」の保育観である。
- (2) 「集団指向—個人指向」では両者ともどちらといえないという傾向が強い。また、集団での食事場面でのあいさつについては年齢による発達差を、偏食については個人の嗜好や発達を考慮しているのか明確に集団指向、個人指向と言えない結果を示している。
- (3) 「のびのび重視—しつけ・安全重視」では、個人の発達差を考慮しながらも基本的生活習慣を身につけることを重視し、しつけ・安全重視の傾向が両者ともに見られる。
- (4) 指導経験年数と保育観では、10年以下の若年群と11年以上の年長群の両群間で目立った特性は見られなく、比率差から若年群は少々時間がかかっても正確にできる子、仲間との協調性のある子、教師も一緒に子どもと遊ぶ、偏食を避ける指導の厳しさ、基本的生活習慣よりものびのびと活動するといった行動面に特性の一端をみることができる。11年以上の年長群は、子どもの自己主張、独自性、遊びに熱中している時は遊びを優先するといった心理面への配慮に特性の一端を見せている。

今回はアンケートによる調査結果であり、実践しているとは明確に言えないものの、幼稚園、保育所の両者はよく似た保育観、すなわち、子どもの発達、個性、興味、意欲等を考慮し、子どもの内発的動機、存在観、能動観を重視した保育活動である。

しかも、発達差を認識しながら、集団指導で基本的生活習慣を身につけるためにはに集団指向、しつけ・安全指向の指導にならざるを得ないと言える。

最近是指導に代わり援助と言われているものの、どのような援助法が子どもにとっていいのであろうか、今回の回答の中に『援助とは・・・幼児理解が十分にされない適切な援助はできないと痛切に感じています（公立幼稚園、保育歴24年）』といった意見もあり先ず、子どもを理解、承認することが保育の原点であろう。

イソップ寓話集に旅人のコートを脱すには北風よりも太陽の方が適しているように、保育に当たっても目標に向かって熱烈に指導するよりも、幼児の内発的動機を醸しだす環境づくりに視点を置いた指導が原点であろう。

（ご協力いただいた幼稚園、保育所の皆様に感謝します。）

参考・引用文献

- 1) 千羽喜代子：乳幼児の発達と保育内容（総説）、保育学年報、フレーベル館、33、8—11、1995.
- 2) 佐々木保行・佐々木宏子・鈴木敏昭・高梨一彦；イメージ測定からみた幼稚園および保育所に対する認知構造、保育学年報、フレーベル館、17—26、1988.

- 3) 森楸・大元千種・西田忠男・植田ひとみ：幼児教育における指導法と保育イデオロギー，
広島大学教育学部紀要，87-96,33,1985.
- 4) 森楸・大元千種・植田ひとみ・西田忠男：保育学生のBelief System,広島大学教育学
部紀要，153-163,34,1986.
- 5) 梶田正巳・後藤宗理・吉田直子：保育者の「個人レベルの指導論（PTT）」の研究，
名古屋大学教育学部紀要-教育心理学科-，32,173-200,1985.
- 6) 中澤 潤・鍛冶礼子・石井恭子：幼稚園教師の食事場面における援助の分析，保育学
年報，フレーベル館,33,59-67,1995.
- 7) 前掲書6)と同じ